

Eureka XI

六年制通信 No.36 令和6年2月16日(金)号

学習は終わらない

「君の誕生日は？」「2月20日です」「220か。いい数字だ。学生時代に僕が学長賞をとった記念の時計に刻まれた数字は284だ。220の、自分自身を除いた約数は1, 2, 4, 5, 10, 11, 20, 22, 44, 55, 110だ。これらを全部足すといくつになるかね。そうだ、284だね。では284の、自分自身を除いた約数1, 2, 4, 71, 142を足すと、今度は220になる。こういう数字を友愛数と呼ぶんだ。阪神タイガースのエース江夏の背番号28は、自分自身を除く約数1, 2, 4, 7, 14の合計が28になる。これを完全数と言うんだ」、ちなみに完全数は、1から順番に自然数を足した和になるそうなの。28なら $1+2+3+4+5+6+7$ ですよ。何の話かと言えば、これ「博士の愛した数式」という映画の一コマなのです。そして、この映画の後半で野外でかがり火をたいて能を鑑賞するシーンがあるのですが、そのとき小鼓を担当してはったのが、先日能楽囃子体験教室で来校された大倉流小鼓十六世宗家の大倉源次郎先生だったのです。私、小川洋子原作の本も映画も好きで、つい最近もう一度観たら大倉先生に気づいたわけ。先日ご本人に確かめたら「そうなんです。テレビで流れた時は残念ながらカットされていたんですけどね。よく気づかれましたね」とのこと。私はプライムビデオで観たのでした。

さて、大倉先生のような芸事の修業は一生続くと言われても素直に納得がいくのですが、実は私たちの学習もそれが何であれ一生続くと思います。しかし学校を終えたら学習は終わりと思っている人が案外多いようです。いつも言うように、大学に入ったらそれを機に勉強をやめてしまうようではいけません。大学に入って何かの研究者になる人だけが「学び続ける人」ではないのです。何か特別な領域を専攻していなくても、生きている限り少なくとも「ことばの勉強」は続きます。読書を通して私たちは知らなかった表現、素晴らしい言い回し、そういう言葉にたくさん出会います。もうこれですべてを知り尽くした、なんてことは決してありません。ですから自分の母語一つ考えてみても、生きている限り学習は続くわけです。昔、修得の困難なことで知られる古典ギリシア語を勉強しようとした学生に先生が、しっかりと身につけるのに一生の半分が必要で、それを維持するのに残りの人生が費やされるが頑張ってみるかと言われ大いに怯んだという話があります。これは極端ですが、近代語の学習一つ取り上げても、学校で完結するわけではなく卒業後も続くわけですから、もっとも重要なことは学習者が学びを継続できる「自律性」を涵養することです。「自律性」などと言うと難しく感じるでしょうが、簡単に言えば「自らの学習に責任を持つことのできる能力」のことで、もっと平たく言えば「独学を続けられる能力」のことです。

「ことばの教育を問いなおす」(鳥飼久美子他 ちくま新書)の中に、昭和の初期に活躍した国語教師大村はまの言葉「ことばを育てることは、こころを育てること、人を育てること、教育そのものである」が引用してあったと思います。本当にその通りだと思います。学校の役割を考えると、生徒が卒業し一人で世の中を生きていかななくてはならなくなった時、言葉の力が足りなかったらどれほど惨めであるかという視点が必要です。そういう惨めな思いをさせてはいけない、それが学校の最低限の役割でしょう。学校教育を受けたなら、少なくとも母語においては言葉を操るのに不自由しないようにならないといけません。義務教育においては特にそうですが、日々の生活において普通に聞いたり話したり読んだり書いたりするのに事欠かない、何の抵抗もなしにそれらの力を活用していけるように指導するのが学校の基本的な役割ですね。教師の仕事の根底にはこの視点が必要だと思います。「書は人なり」といって、字を見ればその人がわかると昔の人は言いました。最近は電子機器の発達によって文字は書くものではなく打つものになってしまっていますから、字の下手な大人が増えました。残念なことです。字の上手い下手はともかく、語彙と話し方を観察すればその人の教養と人格がわかりますね。ですから、言葉の乱れは人格の乱れに繋がります。豊かな語彙は教養の深さを表します。言語学では思考は言語に制約を受けるかという問題があって、つまり日本人なら日本語の範疇でしか思考することができないのではないかという問題ね。皆さんはどう思いますか。難しい問題ですが、少なくとも私は民族の情緒とその言語は密接な関係にあると思っています。だからこそ言葉に感動するのですからね。いくつになっても言葉に触れて感動のある限り私たちは学び続けるべきでしょう。

今週のおすすめ

・東野圭吾 『ブラック・ショーマンと覚醒する女たち』 (光文社)

前作『ブラック・ショーマンと名もなき町の殺人』は長編でしたが、今回は連作短編集です。私はこっちの方が好きです。東野さんくらいになると物語に破綻はないし伏線もきれいに回収されるし、後味のよいミステリーになっているので安心して読めますね。元一流のマジシャンで東京は恵比寿で隠れ家的なバー「TRAPHAND」を営む主人公の神尾武史と姪で建築士の真世、この二人が主人公。真世が持ち込む難問を武史が鮮やかに、やや強引に解決するという短篇集。マジシャンですからね、人をだますのも人の嘘を見抜くのも得意というわけ。全編を通してもう一人、「玉の輿」願望の美菜も脇役として登場、と思いきやラストの一編では突然メインキャストになります。気になる男を誘っては神尾の店に連れてきて、ハワイに別荘を持っているなどと、その男の言っていることが本当かあるいは嘘か秘かに「鑑定」をしてもらうわけですが。神尾を頼っているうちに、美菜は自分が本当に追いかけてきたもの、そして諦めてしまった、そう思い込んでいたけどまだ心にくすぶり続けていた夢に気づかされる、ラストはそんなお話です。登場人物を応援したくなるような本です。今までの東野さんの作品の中でも好きな方だな。前作を読んでいなくても十分に楽しめますよ。

BGMは Bryan Adams の *I Do It For You* でした…。